

全国連会報

第69号
平成27年3月31日発行
全国高等学校
国語教育研究連合会
〒113-0034
東京都文京区湯島
1-4-25 斯文会館内

ご挨拶

全国高等学校国語教育研究連合会会長
東京都立田柄高等学校校長



大池 公紀

レゼンテーション、グループ討議、パ
ネルディスカッション、ディベートに
バスセッション、ブレインストーミン
グなど言語活動を重視した教育活動の
方法が、丁寧に書き込まれていました。
中学校までの義務教育の教育手法は、
変わってきています。

平成二十六年十一月二十日中央教育
審議会「初等中等教育における教育課
程の基準等の在り方について（諮問）」
を読むと、既に新しい学習指導要領の
改訂に向けてスタートが切られている
ことが分かります。機会があつて、幾
冊かの中学校の教科書を拝見する機会
がありました。定番の教材、向田邦子
『字のない葉書』、太宰治『走れメロ
ス』、島崎藤村『初恋』、魯迅『故郷』、
その中に混じって、どの教科書にもプ

さて、高等学校教育の国語に目を転
じてみると、果たして如何でしょうか。
高等学校国語教育も「言語活動の充実」
を踏まえ、一方的ではない教育、双方
向の「考える」教育への転換が求めら
れてきています。生徒とのやり取りを
活性化させたアクティブラーニング、
反転授業、協同学習など、生徒が主体
となる授業への変革が望まれています。
このような流れの中で、他の教科が苦
戦を強いられているにもかかわらず、
国語教育は生徒とのコミュニケーション
を取りながら、交流型の授業実践を

示しやすい教科科目です。今こそ、授
業改革を進め、新しい時代に対応でき
る「思考する」国語教育への転換を願っ
ていきたいと思います。

平成二十六年十一月六・七日の両日、
全国高等学校国語教育連合会第四十七
回研究大会「千葉大会」が開催されま
した。全国連研究大会が、五十年近く
に渡って継続的に開催できますのも、
全国の国語教育に携わってこられた高
等学校の先生方の思いが、次代に引き
継いでこられた成果の現れといえます。
世代交代の時期を迎えた高等学校教育
の中で、実践を重ね、継承していくこ
との重要性をひしひしと感じておりま
す。

全国の先生方の強い期待に応える今
大会の開催に当たり、千葉県高等学校
教育研究会国語部会の皆様には、周到
なる企画・準備にご尽力いただきました
こと、紙面にて失礼とは存じますが、
篤く御礼申し上げます。

今回の研究大会主題は『ことばの未
来再発見 ―伝え合い、つながるために
―』でした。今、高等学校では国語教
育だけではなく、全ての教育活動の中
で言語・言葉に関する能力を育成する
ことが求められています。思考力・判
断力・表現力を育成するためにも、こ
れまで以上に言語能力、生きた日本語
力の伸長が急務な課題となっています。
思考の基盤となっている日本語を土台
にした言語活動の充実度を高める、そ
れこそが学校だけではなく日本の様々
な社会でも求められています。「こと

ばの未来再発見」のために実際にご足
力いただくのは、現場の先生方です。
その先生方の授業力を培う研鑽を積む
研究大会となりました。

大会第一日目は、文部科学省講話と
して、文部科学省初等中等教育局教育
課程課教科調査官の大滝一登先生より
お話をいただきました。新しい学
びの流れなども織り込んでいただき、
未来形のお話をいただいたと実感して
おります。

記念講演では、明治大学教授・齋藤
孝先生をお招きして『日本語力とコミュ
ニケーション力』と題してご講演いた
だきました。齋藤先生は、寒さを感じ
る時期にも関わらず汗びっしょりにな
られながらパワフルにお話しいただき、
私どもは齋藤ワールドに引き込まれて
しばし時を忘れてしまいました。

大会二日目は、県立高校、私立高校
合計七校を会場として、公開授業、研
究発表及び研究協議を行いました。

「ことば」「聞く力・話す力」「読む
力」「表現力・書く力」など今後の国
語の方向性を見据えた時宜に合った
テーマが並びました。参加された先生
方にとって有意義な研修になったもの
と信じております。

最後になりましたが、今大会実施に
あたって、文部科学省、千葉県教育委
員会、千葉市教育委員会、千葉県私学
協会、千葉県高等学校校長会をはじめ、
多くの関係機関からご支援をいただき
ましたことに、こころより御礼申し上
げます。

全国高等学校国語
教育研究連合会

第四十七回研究大会 千葉大会報告

大会実行委員長 田邊 義博

今年度の全国連第四十七回研究大会千葉大会には、全国から多数の先生方に御参加いただき、誠にありがとうございました。

また、大会開催にあたり、大池公紀会長をはじめ、全国連役員及び事務局の皆様、並びに各方面から、多大なる御支援と御協力を賜りましたことに、衷心より感謝申し上げます。



さて、千葉大会は、「ことばの未来再発見ー伝え合い、つながるためにー」というテーマをもとにした内容を

を目指しました。大会日程は、昨年度の愛知大会に倣い、大会第一日の開始を午後からとして全体会、第二日は県内七校を会場に分科会を開催。午後は、希望の文学研修コースへの文学散歩としました。また、今回は、千葉県立幕張総合高等学校をメイン会場とし、全国から約七百名の先生方の御参加をいただくことができました。

○全体会

第一日の全体会では、開会式・総会に続き、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の大滝一登氏から「高等学校国語の授業改善ー新しい

時代に向けた授業づくりー」と題して、御講演をいただきました。

国立教育政策研究所が提案する二十一世紀型能力や子どもたちの現状・中教審の答申案にある改善点などから説き起こし、言語活動の充実も含め、授業改善の四つの方向性を示し、評価と指導の一体化を図りながら、学力のさらなる向上・授業の改善に向けての貴重なお話を伺うことができました。

記念講演は、「日本語ブーム」の火付け役として知られる明治大学の齋藤孝氏を講師としてお迎えし、「日本語力とコミュニケーション力」と題する御講演をいただきました。「身体」を基盤に置く独特の教育論から、舞台を



全体会会場の県立幕張総合高校

自在に動き、観客席の先生方に語りかけながら、「国語」の持つ意味、「日本語」を学ぶ意味、さらに、「学校で

学ぶ」意味など、示唆に富むお話をいただきました。講演の後半二十分ほど



全体会に先立ち開催された
全国代表者会議

の身体を使ったコミュニケーション演習では、観客席の先生方もジャンプやハイタッチなどをして、改めて、「元気に伝える」素晴らしさを実感しました。また、第一日全体会終了後に開催した国語教育懇談会には約八十名の参加をいただき、美しい千葉港の夜景を楽しみながら、情報交換を行うことができました。

○分科会

第二日は、それぞれ特色ある実践を展開している県内七校を会場としての公開授業と、研究発表・研究協議を行いました。会場校の先生方の工夫を凝らした授業や、県内の先生方の実践をもとにした深い研究成果を御発表いただきましたが、いずれの会場も、御参加いただいた先生方の熱い思いと相まって、活気ある分科会となりました。

○文学研修

大会第二日の午後は、ふさの国をめぐる三つの文学研修コースを設定し、

文学散歩を企画いたしました。

一つは、「国立歴史民族博物館」を中心に、歴史の町佐倉をめぐり、千葉の歴史と文化に触れていただきました。次は、大会テーマに込められた隠しテーマ「はっけんでん」の舞台を訪ねました。今年、刊行開始より二百年の節目にあたる曲亭馬琴の「南総里見八犬伝」の舞台となる「八犬伝のふるさとふさの国」。その史跡を訪ね、伏姫・八房の像など、ゆかりの場所を散策しました。いま一つは、文学の街市川を訪ねました。市川市は、万葉の時代から歌に詠まれ、近代では、永井荷風や北原白秋、さらに、井上ひさしなど、多くの文人墨客が住んでいるところで、今でも文学と芸術の土壌が豊かに育まれております。そんな市川を皆さんでゆっくりと散策いたしました。

○結びに

千葉県での開催は、昭和五十二年以来、実に三十二年ぶりの開催となりました。今回の開催により、全国の先生方との新たなネットワークを築けたこと、また、県内の先生方の力を集め大会成功を果たせたことが、今後を託す先生方に、更なる自信を持っていただけたことと確信しております。改めて、このようなチャンスをいただけたことに感謝申し上げます。

なお、千葉大会の詳細については、「大会集録」をご覧ください。

末筆ながら、次回第四十八回東京大会の御成功を心よりお祈りし、報告とさせていただきます。

研究大会「千葉大会」特集

文部科学省講話

高等学校校国語の授業改善

— 新しい時代に向けた授業づくり —

文部科学省初等中等教育局 教科調査官 大滝 一登氏



高等学校では 昨年度の第一学年入学生から年次進行で新学習指導要領による教育課程が実施され、今年度は二年目を迎えている状況です。国語科は言語活動の充実の中核として言語能力を育成する教科でありまして、皆様も日々授業の改善等に取り組んでいただいていることと思います。

教育ではよく「不易と流行」という言葉が使われます。私の理解では、教育への情熱はもちろん、教師の確かな授業技術、あるいは授業展開の安定感、若手教師ではなかなか到達できない、ベテランならではの手法といったものはいつの時代でも変わらないものであり、「不易」というものではないかと思えます。先達からの教えと自身の努力によって高められた教師の日常には

普遍的な確かさというものがあるのではないでしょうか。

一方で教育には、変わらなければならぬ流行という側面もあると思えます。これは、子供が時代の変化を受ける社会の中で生きていくために、その都度必要とされる能力を育成していく教育という分野において欠かせないことでありまして、改訂される学習指導要領はそうした新しい時代に対応した能力等を示した流行の側面の代表といえるかと思えます。

さて、それでは今日は短い時間ではございますが、私の方から、これから求められる高等学校国語科の授業改善ということでお話を差し上げたいと思えます。皆様、授業実践の御努力を積み重ねていらっしゃる方ばかりで、改めて申し上げることもないわけですが、国の教育改革の動きも速度を増しておりますので、その点も含めましてどうか前向きにお聞きくだされば幸いです。

ざいます。話の中では授業改善ということ、ある課題といったものをかなり先鋭化した形でお伝えすることもございます。全ての国語の授業にこうした課題があると申し上げている訳ではございませんので、あらかじめ御了承ください。

ところでこのようなことを御存じでしょうか。私は四月から教科調査官を務めておりますが、三月まではある大

学校の教職課程で国語科教師を養成する仕事をしております。その経験も含め、いろいろな方々から伺った言葉を並べております。例えば「高等学校にも学習指導要領があったんですか。これは中学校の指導主事の方からの言葉です。」「古典文法なんて覚えても何にもならない。」、これはある同窓会で聞いたものです。この言葉を

聞いてちょっと残念に思ったのですが、古典文法を一生懸命覚えただけでも、社会でそのことが意味あるものになっているのだろうか。「言語活動の充実に一番後ろ向きなのは国語じゃないですか?」、言語活動の充実についてはキーワードとして広まっているけれども、本当に言語活動が授業の中で取り入れられているのか心配になる言葉です。「国語は義務教育だけで十分である。高校に国語は必要ない。」、これはかつて中教審のある委員会の中である委員がおっしゃった言葉だそうです。つまり、私たち国語科教育以外の方からはこのような考えもあるということも知っておく必要があるのではないかと。それから、「国語の先生は同じ教材を繰り返し教えていけばいいから楽ですよ。」、高校国語では「羅生門」や「山月記」などいわゆる定番教材が教科書に出てきます。したがって、これも企業にお勤めのある社会人の方からお聞きした言葉です。「高校国語では言語活動を取り入れた授業を見たことがない。」、これは義務教育の関係者からの言葉です。最後に「社会に必要な能力育成という点で最も問題なのは今の高校国語だ。」、これは今年度の中央教育審議会のある部会で大学関係の委員から出た言葉です。以上、私としてはこうした諸々の文句と言いますか、国語科教育への批判に対して悔しい思いを抱いております。何とかこういった声がなくなればいいなと思っております。

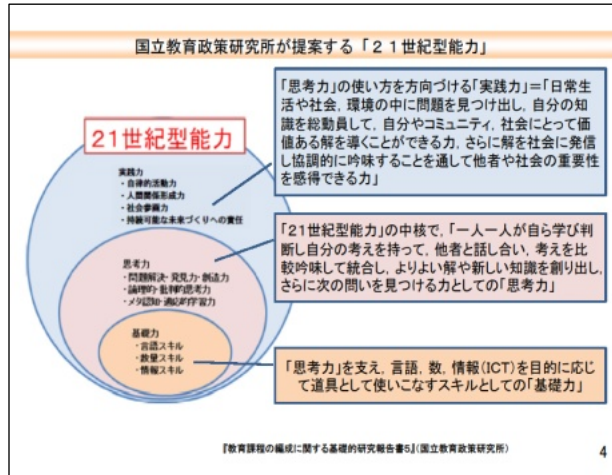
こうした声を踏まえながら、重視すべき社会の変化とそれに対応する資質・能力という点に話題を移したいと思えます。これは、国立教育政策研究所が出した報告書の中で、これから訪れる社会の変化、及びそれらに対応してますます必要となっていく能力を示したものです。「グローバル化」、「情報通信技術の高度化」等よく言われることであります。六番の「知識基盤社会の進展」については、御存じのとおり

| 重視すべき社会の変化とそれに対応する資質や能力 | |
|--|--|
| 1 グローバル化 ○文化等の多角的理解 ○多角的な思考力 ○外国語の習得と発信力 ○コミュニケーション能力(相互理解、合意形成力等) ○国家社会のアイデンティティ など | 4 資源の有限化 ○将来予測と計画力 ○多角的・総合的思考力 ○自己制御力 ○他者と協力しての問題解決能力 など |
| 2 情報通信技術の高度化と利活用 ○情報活用能力(必要な情報を主体的に収集・判断・処理・編集・創造・表現し、発信・伝達する能力)=情報活用の実践力(ICTスキル等)、情報の科学的理解、情報社会に参画する態度 など | 5 少子高齢化 ○子育て理解 ○高齢期の理解 ○生涯生活設計能力 ○勤労観・職業観 ○自己能力開発の態度 ○人間尊重の精神 など |
| 3 コミュニティを基盤とする社会への転換 ○主体的な社会参画 ○コミュニケーション能力(対話力、人的ネットワーク形成力) ○協働による問題解決力 ○人間尊重の精神 など | 6 知識基盤社会の進展 ○論理的(批判的)思考力 ○課題発見・解決能力、創造性 ○言語活用能力(読解力、説明力等) ○コミュニケーション能力(相互理解、合意形成力、人間関係形成力等) ○自立的行動力 ○学習スキル など |

【教育課程の編成に関する基礎的研究報告書3】(国立教育政策研究所)

知識が基盤であるということですが、これは知識さえあればいいということではなく知識を基盤としてそれを活用させていくこと、覚えた知識をそのまま使えばいいということではなく必要な目的や場面に応じて活用していく

そういう社会がますます進むだろうということであり、したがって、論理的思考力、課題発見・解決能力、コミュニケーション能力などを含め、このような力がますます必要になっていくだろうということです。また、国立教育政策研究所では、「二十一世紀型能力」というものを提唱しております。「思考力」を中核としまして、その基



盤に「基礎力」、この中に言語というのを入れてあります。そして一番外側に「実践力」、特に自律的活動力や人間関係形成力など、実際の社会で他の人々と関わっていく力です。この三層構造で提案しましたところ、大変反響が多くございました。国語科で育成すべき能力はこの全てに関わってくるだ

ろうと思っております。特に「基礎力」としての言語スキル、さらに「思考力」、それから一番外側のコミュニケーション等に関わる力も非常に重要です。それからこれもよく言われていることですが、企業が学校教育に最も期待していることは対人コミュニケーション能力の養成、次に論理的思考力や問題解決力の養成です。単なる大学での成績ではないのです。こうした社会の変化を踏まえて、文部科学省では第二次教育振興基本計画を作成いたしました。四つの基本的方向性のうち、「社会を生き抜く力の養成」、特に高等学校ではこのうち「生きる力の確実な育成」を引き続き推進しようという方向です。さらに大学からという位置付けにはなっておりますが、「課題探求能力の修得」についても高等学校でますます求められる力ではないかと思えます。どんな環境でも「答えのない問題」に最善解を導くことができる力を養う。こうした力が、これからの社会、特に国際社会をにらんだときに必要になってくると考えています。

さて一方で、我が国の子供たちの状況ですが、義務教育で全国学力・学習状況調査を行っています。全体としてこの結果によって義務教育の授業改善というものがかなり進んでおります。そして、平均正答率というところで見ますと、各都道府県の力の差については縮小傾向が見られるわけがございます。

す。国語科に関して見ますと、中学校では「説明的文章について表現の仕方や文章の特徴に注意して読むこと」、小学校では「理由や根拠を明確にして書くこと」などの点が数年にわたり、共通した課題として示されています。これらはやはり知識・技能の活用点でして、大きな課題があります。したがって、高等学校にはこのような課題を持った生徒が入学してくるということとを御理解いただければと思います。それから、国際的には、読解力を中心に、改善傾向が見られます。PISA二〇一二年調査ではどの項目でも日本の子供たちの力は明らかにトップレベルであったということで、日本の教育の素晴らしさが証明されたと思えます。しかし、トップレベルの国々と比べますと、成績の下位層がやや多いという点はまだ課題であります。それから他の国との比較という点で申し上げますと、意識調査で気になるのは、「自身自身をどう思うか」という事項で、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」と考える中学生・高校生が他の国に比べると少ないということですね。それから「社会のことは、とても複雑で私に関与したくない」と思う子供は他の国に比べて比較的多いという結果が出ました。さらに高校生の進路選択という点で申し上げますと、「学力が足りないかもしれない」ということを半

縮小傾向が見られるわけがございます。国語科に関して見ますと、中学校では「説明的文章について表現の仕方や文章の特徴に注意して読むこと」、小学校では「理由や根拠を明確にして書くこと」などの点が数年にわたり、共通した課題として示されています。これらはやはり知識・技能の活用点でして、大きな課題があります。したがって、高等学校にはこのような課題を持った生徒が入学してくるということとを御理解いただければと思います。それから、国際的には、読解力を中心に、改善傾向が見られます。PISA二〇一二年調査ではどの項目でも日本の子供たちの力は明らかにトップレベルであったということで、日本の教育の素晴らしさが証明されたと思えます。しかし、トップレベルの国々と比べますと、成績の下位層がやや多いという点はまだ課題であります。それから他の国との比較という点で申し上げますと、意識調査で気になるのは、「自身自身をどう思うか」という事項で、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」と考える中学生・高校生が他の国に比べると少ないということですね。それから「社会のことは、とても複雑で私に関与したくない」と思う子供は他の国に比べて比較的多いという結果が出ました。さらに高校生の進路選択という点で申し上げますと、「学力が足りないかもしれない」ということを半

による「平成二十五年度国語に関する

平成25年度国語に関する世論調査結果①

言葉や言葉の使い方に対する社会全体の関心は、どうなっていると思うか。

→「以前よりも低くなっていると思う」が、30代～60代で、5割前半。

言葉や言葉の使い方に対する社会全体の知識や能力は、どうなっていると思うか。

→「以前よりも低くなっていると思う」が、20代～50代で、6割以上。

言葉や言葉の使い方への影響が大きいと思うものは何か。

→「テレビ・ラジオ」と5割前半は、「学校」「家庭」と2割後半が回答。
(ただし、「学校」は16～19歳で他の年代より高く6割弱となっている。)



数以上の子供が思っているのですが、さらに「自分に合っているものが見つからない」、「やりたいことが見つからない」、「分らない」、「社会に出て行く能力があるか自信がない」と考える子供もかなり多いという結果が出ています。したがって、国際的に見て日本の子供たちの学力はかなり高いと思いますが、自分がどのように生きていけばいいかということに関する意識や、自覚、ビジョンといったものについてはまだまだ心配な状況であります。ここに、国語科という教科はどう関わっているのか。言葉の力というものはどのように関わっていくのかということのは大きな問題であると思います。

それから、新しいデータで、先生方も御覧になったと思いますが、文化庁

世論調査の結果からいくつかお示ししたいと思います。「言葉や言葉の使い方に対する社会全体の関心は、どうなっていると思うか。」という質問に対して、社会人の三十～六十歳代では、五割台の前半の方が「以前より低くなっていると思う」と回答なさっています。同じく「言葉や言葉の使い方に対する社会全体の知識や能力は、どうなっていると思うか。」についても、二十～五十歳代で六割以上の方が「以前より低くなっていると思う」という回答です。「言葉や言葉の使い方への影響が大きいと思うものは何か。」という質問に対しては、「テレビ・ラジオ」が多いのですが、一六歳から一九歳に関しては「学校」という回答が六割弱というところで顕著です。この年代では学校の影響が非常に大きいのです。これは、ある意味でほとんとするといえますか、見方を変えますと、学校の責務というものが重いと見えるのではないかと思います。それから、読書に関して、これも新聞等で話題になりましたが、「一か月に読む本の冊数」について「一冊も読まない」という回答。これは全ての年代で、約半分ぐらいの方ですね。現在はこういう状況にあります。そして「人が最も読書すべき時期はいつ頃だと考えるか。」という質問に対しては、「十歳代」が四十五％程度ということで、最も高いという結果が出ています。したがって、日頃先生方には読書指導に御尽力いただいていると思いますが、社会人を相手に

平成25年度国語に関する世論調査結果②

1か月に読む本の冊数について。

→「1か月に本を1冊も「読まない」と、47.5%が回答。すべての年代で、平成14年度調査より「読まない」の割合が増加。

人が最も読書すべき時期はいつ頃だと考えるか。

→「10歳代」が、44.8%で最も高い。

読書量は以前に比べて減っているか、増えているか。

→「読書量は減っている」と、65.1%が回答。

- 〔減っている〕理由
- ・仕事や勉強が忙しくて読む時間がない。(51.3%)
 - ・視力など健康上の理由。(34.4%)
 - ・情報機器で時間が取られる。(26.3%)
 - ・テレビの方が魅力的である。(21.8%)
 - ・魅力的な本が減っている。(8.5%)
 - ・読書の必要性を感じない。(6.6%)
 - ・近所に本屋や図書館がない。(3.8%)
 - ・良い本の選び方が分からない。(3.6%)
 - ・学校での読書指導が十分でない。(0.5%) など

した、こうした調査におきましても、本をしっかりと読むのはやはり十歳代であると多くの方が考えているという結果が出ております。しかしながら、「読書量は以前に比べて減っているかどうか」ということについては六十五％程度の方が「減っている」というふうに答えています。様々な事情があるのでしようが、私たちとしては、高校生の読書量を増やしていくことが非常に重要であり、そのことがやはり生涯読書ということにつながっていく、言葉

の力といったものを大変広い意味で生涯にわたって培っていくと思いますので、この結果は少し心配な点でございます。

それから敬語については、ほとんどの方が「必要だと思う」と回答なさっ

ていまして、「どのような機会に敬語を身に付けてきたかと思うか」という質問に対しては、「学校の国語の授業」という回答が四十二・六％、「学校内のクラブ活動など」が三十一・七％ということ、「職場」や「家庭」の次に出てきております。したがって、引き続き学校の国語の授業を中心とした教育活動における敬語の指導というものが期待されている、というように考えていいのではないかと思います。

ということで、今後の社会の変化、また、今の子供たちの課題、全ての世代にわたる言葉に関する様々な傾向や課題といったものを一つ一つ見てきたのですが、今度は高校国語に関して見たいと思います。御存じかと思いますが、平成十七年度の調査結果ですが、高校国語がどう思われているのか、十年前はこういう状況でございました。「大切だと思うけれども好きになれない」、そういう子供たちの評価がなされています。「好きになれない」という点は残念ですね。そして特に古典の学習については、いろいろなところで取り上げられているように、「古文が好きだ」、「漢文が好きだ」ということについて、十年前の大変多くの高校生が否定的な回答をしています。いずれも七割を超えているのです。さらにその前の調査が平成十四年調査でして、一回の調査だけでなく、こうした調査結果の傾向が平成十年代には二回にわたって続いています。やがてまた新しい結果等もお示しできる時期が

来るのではないかと思えますけれども、今の高校生が古典の学習にどのような思いを抱いているか、伝統的な言語文化の重視という流れの中で、この数字がかなり改善されていることを願うわけですけれども。

さて、私は三月まで大学で国語科教師を養成する仕事をしておりましたが、講義の最初に「こんな授業はしたくない」「国語の先生になるならどんな授業をしたいのか」「どんな授業はしたくないのか」ということを書かせていました。「こんな授業がしたい」という答えには、本当に高校の国語の先生が熱心で親身になって指導してくれた、あるいは大変面白い話をしてくれた、あるいはいろいろな自分たちの意見を言わせてくれたなど、やはり、高校時代の国語の授業を通して国語が好きになり国語の先生になりたいと思った、そういう意見が数多くつづられていました。しかし一方で、「こんな授業はしたくない」ということについては、例えばですが、こんな回答がございました。「生徒の印象に残らない授業、特に国語は教科書の文章を読むことやそれについて説明することなど、先生が主体となって進められていく傾向が強い。先生が前、話して一時間が終わってしまった」と生徒が感じてしまったときは、授業の中身がたとえ濃いものであっても生徒が理解できているかどうかはまた別の話です。」と、かなりシビアなことを指摘しております。「先生の板書をただ写すだけといった、作

業的な授業ではなく、生徒が板書から何を見出しどのようなことを考えたのかを重視する授業が理想だ。」という回答もあります。あるいは、これは誰しも納得すると思うのですが、「眠たい授業はしたくない。教科書をただ読むだけの、オリジナリティや工夫のない授業では生徒が飽きて眠ってしまう。」というもの。それから「私が高校の時の授業だったんですが、毎回意味や活用だけ教えられた単語や助動詞などの小テストがあり、ただ暗記することだけが大切と言われてきた授業は、私にとって大変苦痛でした。なぜそうなるのか、本当に暗記しているだけで力がつくのかといったような点を曖昧にされている授業はちゃんとした理解に到達できないと思います。そして何より宿題ばかりが出され、質より量といった勉強の仕方にはその意義さえ見出せませんでした」という回答。私自身も現場におりましたときに、そういうことをしていたのではないかという反省を抱いておりますが、生徒の方もこんなことを言っているんです。そして最後に、「すごく分かりやすい授業をしてくれた先生、だけれども、その授業は予備校のような要点や目の付け所など、国語の問題対策のような授業でした。確かに分かりやすくてポイントが分かるようになったのですが、どこか物足りない授業でした。」という回答も。以上のようなことを、大学に入ってくると、元高校生たちが吐露してくるのです。私としては、そこまで言う

なら、理想の授業をやってみようというところで模擬授業等に取り組みさせておりました。

それから平成二十一年度とちよっと古いのですが、ある調査（財団法人日

授業や学習指導において心掛けていること（質問項目は一部抜粋）

| | 高等学校 | | 中学校 | |
|---|-------|-------|-------|-------|
| | 全体 | 国語 | 全体 | 国語 |
| 教科書にあることより丁寧に教える授業 | 44.8% | 52.8% | 33.8% | 35.9% |
| 教科書などの課題に加え、教員が独自に工夫した教材や実技の課題を扱う授業 | 57.1% | 52.8% | 50.3% | 44.1% |
| 児童生徒がグループで話し合い、考えなどをまとめる授業 | 6.5% | 7.3% | 25.9% | 34.1% |
| 児童生徒が、自分で課題を選択し、調べたことや考えたことに基づいて、レポートを書いたり発表したりする授業 | 12.2% | 9.3% | 12.8% | 17.7% |
| 本時のねらいや目標を授業の導入部などでしっかりと明示する授業 | 29.3% | 27.5% | 45.0% | 49.5% |
| 小テストやワークシートなどにより、学期末などだけでなく、日常的に児童生徒に学習状況の評価を知らせる授業 | 34.7% | 54.4% | 29.2% | 48.2% |
| 宿題を定期的に出す授業 | 16.2% | 22.6% | 8.9% | 9.1% |

- 教科書、小テスト、宿題等への依存度が高く、教師が教えるという意識が強い。
- 生徒の主体的な活動、言語活動を授業に取り入れる意識が低い傾向。

本システム開発研究所『学習指導と学習評価に対する意識調査報告書』）から、高校の授業や学習指導についての傾向がうかがえます。中学校の国語や全体と比較したデータなのですが、高校で数値の高いのは「教科書にあることを丁寧に教える授業」。あるいは「小テスト、ワークシート、宿題を意識した授業」については、中学校の国語の先生方よりも数値が高いという結果になっていきます。一方、「グループで話し合い、考えをまとめる授業」、「課題を選択し、調べたことや考えたことに基づいて、レポートを書いたり

発表したりする授業」については数値が低いということで、少し残念なのですが、「教師が教えるんだ」といった意識が他の教科とか中学校に比べて強いという結果です。一方で、生徒の主体的な言語活動については低いということが言えると思えます。五年前のデータですので、現在は改善されていることを願うわけですが、もし全体的に、先生方の学校においてこうした傾向が見られるとしたならば、そろそろ時代の流れが変わってきているということに御留意いただきたいと思います。

さて、その時代の流れということですが、国の教育改革がかなり急ピッチで進められております。御存じのように教育再生実行会議の議論を踏まえて、中教審の審議も進んでおります。小中一貫教育の制度化、それから高大接続改革ということで、高校教育、大学教育、さらには大学入学者選抜、これらを一体的に改革していくということで、もうまもなく、答申が出されるスケジュールになっております。それから、次期学習指導要領に向けた動きというものが、これもまもなく、諮問が行われる予定でございます。その前段階といたしまして、「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」が開かれまして、論点整理が公表されました。また、英語教育ですとか、道徳教育、それから小中一貫教育の制度化をにらんで他の要素も踏まえ、大学の教職課程、教員養成課程の改革といったものも検討さ

れているところであります。ということ
とで、私たち高校国語としてもこれか
ら大きな影響を受けるような改革がこ
れから進められようとしております。

ポイントだけ申し上げますと、学習指
導要領の改訂については、指導要領の
構造そのものを見直すとかという動き
になっていきます。育成すべき資質・能
力ということが謳われているわけです
が、教科横断的に、ある教科に縛られ
るのではなくて、まず子供たちにこう
いった資質・能力を身に付けさせるべ
きであるということを確認にしようと
はないかということ、検討会の論点
整理では、主体性・自立性に関わる力、
関係改善能力、課題解決能力等が例示
されています。こうした力が必要だ、
その上で、各教科ではさらにいろいろ
なことを教えていく、ということを考
えようということをごさいますして、も
うちょっと具体的に申し上げますと、
まず、「教科横断的な、汎用的なスキ
ル」、スキルという言葉を使ってお
りますが、必ずしも狭い意味ではなくて
広い意味での、論理的思考とかコミュ
ニケーション、意欲あるいはメタ認知
も含めたものを総体的にスキルと呼ん
でいます。こうしたものをまず定め、
その上で「教科等の本質や教科に固有
の知識」、「個別スキルに関するもの」
を考えていくのではないかとということ
です。高校国語についてはまだ具体的
にこういう方向でということはまだ全
く白紙の状態ですが、改訂に向けてこ
ういった一つの提案というものがなさ

れているというふうに御理解ください。
そして、「何を知っているか」だけで
はなく、「何ができるか」という視点で
考えていく必要があるのではないかと
そのためには学習評価ということもよ
り重視していかねければならない。あ
る意味、学習指導要領と学習評価とい
ったものが今まで以上に整合性をもつた
形で、今後改訂が進められるという可
能性がございます。それから高大接続
については教育再生実行会議の第四次
提言を行いまして、先生方もよく御存
じかと思えます。これにつきまして
答申案が今検討されているということ
でして、お配りした資料にはその一
部を抜粋としてお示ししているのです
が、思考力・判断力・表現力、主体的
な協働といった点で現在の高等学校教
育、大学教育もそうですけれども課題
があるということが共通の認識でござ
います。したがって言語活動の充実と
か、思考力・判断力・表現力等の育成
ということが、現行学習指導要領でも
謳われておりますが、その考え方が次
期学習指導要領はもとより、大学教育、
さらには、大学入試まで共通した形で、
一貫したものとして改革されていくと
いった動きにもなります。ただ今の総
会でもお言葉に出ました「アクティブ・
ラーニング」、それから、「達成度テ
スト(仮称)」として呼ばれていたテ
スト、これも名称が変わり、「高等学
校基礎学力テスト(仮称)」、それと
センター試験に代わる「大学入学希望
者学力評価テスト(仮称)」という、

こういったものとして、はっきり言い
ましてどうやら本格的な改革に向かい
そうである、ということだけ申し上げ
ておきたいと思えます。具体的な制度
設定等は今後ということ、先生方に

学力評価のための新たなテスト (仮称)

CBTの導入や両テストの難易度・範囲の在り方、問題の蓄積方法、作問の方法、記述式問題の導入方法、成績表示の具体的な在り方等について一体的に検討。

| | |
|--|--|
| <p>高等学校基礎学力テスト(仮称)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆生徒自らの高等学校教育における学習の達成度の把握(指導改善や進学等での基礎学力の証明等も) ◆参加を希望する高校生が対象。 ◆「思考力・判断力・表現力」の評価も含めつつ、「知識・技能」確実な習得を重視。 ◆成績を段階表示。 ◆多肢選択式を原則。記述式導入を目指す。 ◆在学中に複数回、高2・3年受験を可能。 ◆CBT方式での実施を前提に開発。 ◆全国学力・学習状況調査のA問題及びB問題の高校教育レベルの問題を想定。 | <p>大学入学希望者学力評価テスト(仮称)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆これからの大学教育を受けるために必要な能力の把握(「思考力・判断力・表現力等」を中心に評価) ◆大学入学希望者が対象。 ◆「教科型」に加えて、「合教科・科目型」「総合型」の問題を組み合わせて出題。 ◆段階別表示による成績提供。 ◆多肢選択式だけでなく記述式を導入。 ◆年複数回実施 ◆CBT方式での実施を前提に開発。 ◆知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し成果等を表現するための力を評価する。PISA型の問題を想定。 |
|--|--|

19

おかれましたは、ぜひとも敏感に文部
科学省のホームページ等をチェックし
ていただければ有り難いと思います。
「高等学校基礎学力テスト(仮称)」
については、イメージとしては義務教
育で行われている、全国学力・学習状
況調査の問題といったものが想定され
ています。それからセンター試験に代
わるテストの方では、いわゆるPISA
A型の問題というものが想定されてい
ます。このとおりになるかどうかはま
だ答申が出されていませんし、分か
りませんが、ほぼこの方向性で進んで
いくのではないかと私個人は

考えております。
ということ、大学入試も含めて高
校では大変関心のおありの点だと思
うのですが、大きな改革が行われよう
としている。したがって、高校国語も大
きな影響を受けるであろうということ
が予想されます。

さて、それでは授業改善ということ
でお話ししたいと思うのですが、いわ
ゆる知識の詰め込み型といった授業ば
かり、それを中心に一年間なさって
いるという、そんな授業も少なくなっ
てきていると思うのですが、そういう授
業だけではもうこの先の時代には対応
できないという、そういう時期に差
しかかってきていると思えます。子供
たちも変化してきていますし、社会も大
きく変化している。そして学校教育法
の第三十条第二項、これも御存じのよ
うに、法律として初めて学力といっ
たものが規定されたということで、「基
礎的な知識及び技能を習得させると
もに、これらを活用して課題を解決す
るために必要な思考力、判断力、表現
力その他の能力をほぐくみ、主体的に
学習に取り組む態度を養うこと」に、特
に意を用いなければならぬ。」と規
定されております。これに向けて私
たち高校国語もより改善をしていかな
ければならないという状況にあります。
そして、学習指導要領はその教育課程
の基準ということで、学校教育法施行
規則に定められております。
さて、大変失礼な質問を申し上げます
よろしいでしょうか。今日御参加の先

生方は現行の高等学校学習指導要領を日々御覧になつておられるでしょうか。義務教育に比べて高校の先生方はなかなか学習指導要領を御覧いただく機会が少ないということを、指導主事等を含めていろいろな方からお聞きしています。読まれているとは思いますが、学習指導要領の内容は大きく変わってきております。国語科では「目標」の次の「内容」の中に、指導事項だけではなく言語活動例が盛り込まれました。さらには、従前の「言語事項」も「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と改められました。この言語活動例ですが、言語活動を通して指導事

「国語総合」における3領域1事項

3領域は時数として重ならない

A話すこと・聞くこと
 ○話題設定、取材、構成、話すこと、聞くこと、話し合うこと、交流、評価など。
 ※話すこと・聞くことを主とする指導に15～25単位時間程度を配当。

B書くこと
 ○題材選定、取材、表現の工夫、構成、記述、推敲、交流、評価など。
 ※書くことを主とする指導に30～40単位時間程度を配当。

C読むこと
 ○表現に即した理解、文章の解釈、考えの形成、読書、情報活用など。
 ※古典と近代以降の文章の授業時数はおおむね同等。古文と漢文は一方に偏らない。

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】
 ○伝統的な言語文化に関する事項、言葉の特色やきまりに関する事項、漢字に関する事項。
 ※3領域の指導の中で深める。文語や訓読のきまりについては読むことの指導に即して。

23

項を指導する、という規定になっております。そして、「国語総合」、これはその名の通り、三領域一事項を全て含んでいる、そういう意味において

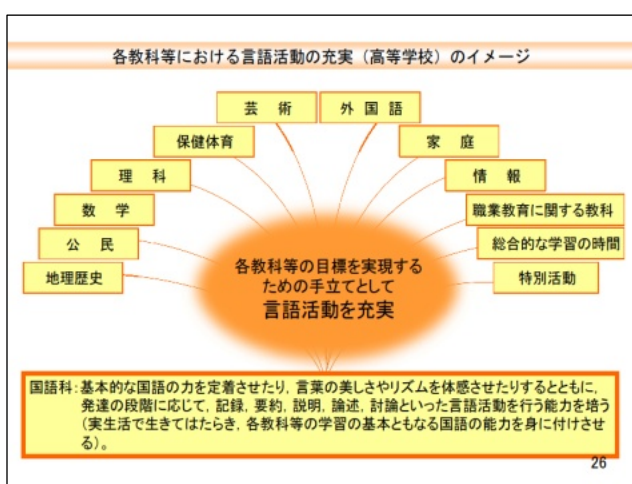
の総合科目ですが、A・B・C各領域と事項ということで、それぞれ指導事項が示されています。特に御留意いただきたいのは、言語活動の充実を進めていかれる際に、生徒にいろいろな言語活動をさせていくわけですが、読むことの中に話し合いを取り入れる、それだけではなく、やはりA領域、B領域をきちんと確保して指導していただきたいと思えます。学習指導要領の中にも指導時数の目安が規定されており、これは、三領域というのは時数としては別の領域ですので重ならないということになっていきます。ですから、読むことの中で話し合いを行ったので、話すことを指導したということにはならないわけですし、よく言われるのが「羅生門」を読んだ後に話し合いをするというのは一体何のためなのか。これは話し合いの能力を付けるために取り入れているのではなく、やはり、「羅生門」の読みを深める、読み味わうために取り入れているのだということだと思います。それは、話し合う能力の育成という目標に直結しているというよりは、むしろ活動として、手段として取り入れているというところで、目標と活動というものを区別する、そういう考え方が大変重要になってまいります。この点にぜひ御留意いただきたいと思えます。一方で、なかなか指導時数の確保が難しい、こういう声をお聞きしないわけではないのですが、今申し上げたような状況ですので、読むことが重要であることは依然として変わらな

いわけですけれども、読むことの能力を育てるためにも、例えば、話し合い方については「話すこと・聞くこと」領域で指導する、そうしたことも大変重要だと思えます。指導要領の具体的なことにつきましては、是非ともまた改めて御覧いただければと思うのですが、例えば新しく設けられている点として領域を超えて共通しているのは、「根拠」や「論拠」、あるいは「表現の仕方」という言葉です。しっかりと根拠に基づいて自分の考えを持つ、あるいはテキストの内容はもちろんですが、内容だけではなくその表現の仕方など、メタ的なところから考えていく、そういった力を非常に重視した指導要領になっていきます。読むことについても、指導事項としては「表現の特色」が出てきますし、それから工では「構成や展開を確かめる」、そして「評価」をする、「書き手の意図をとらえ」る、こうした点がより新しいところだと思います。ただおそらく、こうしたことは以前から授業の中でさせていた先生方が多いのではないかと思います。それがますます指導要領として具現化された、強められたというふうに御理解ください。それからもう一つ御注意いただきたいのは、たとえばこの(二)のイですけれども、言語活動例の中に「メディア」という言葉が今出ております。「文字」、「音声」そして「画像」といったもの、こんなところについての目配りも、情報化社会の中でよろしくお願ひしたいと思えます。これはICTの

活動も含めてということで、国語科の授業をより柔軟で豊かなものにしていくという方向でございます。

言語活動の充実について、国語科の中で育成した言語能力を国語科だけでなく、他教科にも役立つ力として、育てていかなければいけないということがございます。言語活動の充実について示したスライドですが、国語科は一番下の基盤のところの位置付けら

れています。記録、要約、説明、論述、討論といった言語活動を行う能力を国語科の中で育成し、それが各教科の中で活かされるような形で進めていく、そのときの言語活動というのは、その場だけの思い付きといったら失礼ですが、取って付けたようなオプシンのような活動ではなく、やはり目標とのつながりが明確な一連のものという位



置付けでということですが、『言語活動の充実に関する指導事例集』の中では伊勢物語の東下りを双六にするといったような、そういった事例もお示ししています。一見双六というゲームなのかと感じられるかもしれませんが、こうした双六を作るには、本文をしっかり読み込まなければなりません。登場人物の、都との心理的な距離を双六に表すために、しっかりと本文を読み込む、そしてグループで話し合っ、意見を交換しながら修正していったりということが必要です。このとき、言語活動といったものが「文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりする。」という目標につながるような形で位置付けられるということが

言語活動を取り入れる際のチェックポイント(例)

- 1 目標実現のための手段として有効な言語活動になっているか**
 - × 目標実現にかかわらない、取って付けたような活動
 - × 言語活動ありきの授業(本末転倒、イベント化)
- 2 言語活動が思考・判断・表現の学習活動として機能しているか**
 - × 話し合いを取り入れただけで見通しも振り返りもない
 - × 児童生徒が言語活動を行う意義を理解していない(他律的活動)
 - × 教師が言語活動を行う留意点や方向を明示していない
- 3 様々な言語活動のうち、適切な言語活動といえるか**
 - × いつもワンパターンな話し合いばかり
 - × 表現させる前に、聞く、読む活動が十分行われていない
- 4 学習評価を意識して言語活動を取り入れているか**
 - × 評価規準、評価方法を意識せず、単に活動を取り入れただけ
 - × 個々の児童生徒の能力育成を見取ることができない

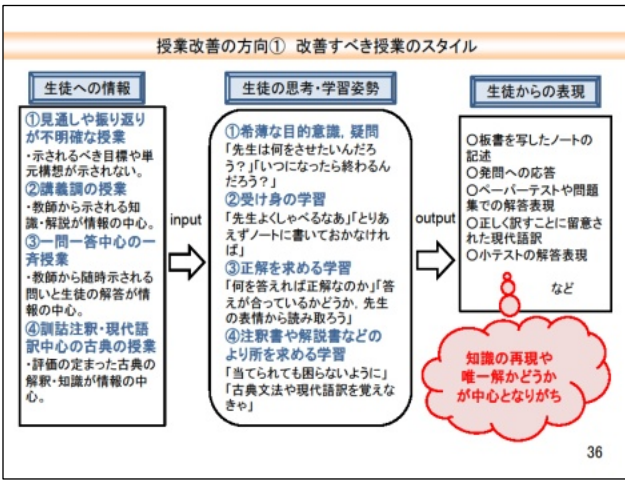
文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY AGENCY 29

大変重要で、この、言語活動ですがよく、言語活動は生徒にさせてみると

大変盛り上がりたりするのですが、目標の実現に関わっていないのではないかと、活動だけが盛り上がりつつあるのではないかと、そういったものがあると思います。それから、まず先にこんな言語活動をさせてみたいというところから始めてしまい、目標が後付けになってしまふ。そういう授業というのは望ましくありません。要するに、思考力・判断力・表現力を育成する学習活動として機能しているかどうかということですが、「話し合いなさい」というだけの授業。見通しも振り返りもない。こんな授業です。それから、当の生徒自身が「なぜ先生がこの活動をさせているんだろうか」、「私たちなぜこの活動をしなければいけないんだろうか」という、意義を理解していないという授業。これもまた「主体的」ということにはやはりつながりません。それから肝心の先生が、言語活動を行う際に活動の方向性を明示していない。こうした授業はなかなかうまくいかないだろうと思います。今申し上げたことなのですが、言語活動自体はいろいろ考えられるのですが、目標の実現のためには、やはりこれが相応しいと、例えば「書き手の意図を評価する」というときに、話し合いもあるでしょうし、何かを書かせるということもあるでしょう。そういうときに、例えば人に勧めさせる、というのと何かを書かせたり発表させたりということを併せて取り入れれば、「評価する」というのはうまく

つながるであろうということにはよく言われることです。それから最後に、学習評価というものを意識して言語活動を取り入れているかということも非常に重要です。活動はさせたものの、一体生徒にどういう力が付いたかがうまく見とれないということだと、それが生徒の力として本当に育成されたのか把握できません。この点も含めて、言語活動の充実に取り組んでいただければと思います。それから、できれば国語科が中核となっていたらいいと思います。それから今回の総則編で小・中・高で一貫して「見通しを立てたり振り返ったりする学習」が重要だということをお示ししております。先ほどちょっと申し上げましたが、高等学校の場合、なかなか授業の目標が毎時間冒頭に示されないということをよくお聞きします。どこをゴールにして生徒は先生について行けばいいのかがなかなか分からない、終わった後に待っているのはテストだけで、自己評価もない、そんなことが義務教育に比べて多いということをお示ししております。ですから、やはり生徒が主体的に学習を進めるという意味では見通しや振り返りということが重要であるということになります。そしてこれも全国学力・学習状況調査の結果ですが、見通しや振り返りの学習活動、あるいは言語活動を取り入れた学校ほど、いわゆるB問題の平均正答率が高いということが示されています。ですから義務教育段階では、こうした

活動が大変有効であるということが調査で証明されています。高等学校には残念ながら、全国的な調査というものはまだ行われておりませんが、先ほど申し上げたような、新しい教育改革の中で今後こういったデータがお示しできるようになるのか、それは分かりませんが、高等学校にもおそろしく有効であろうと思っております。是非とも前向きにお取り組みいただきたいと思います。

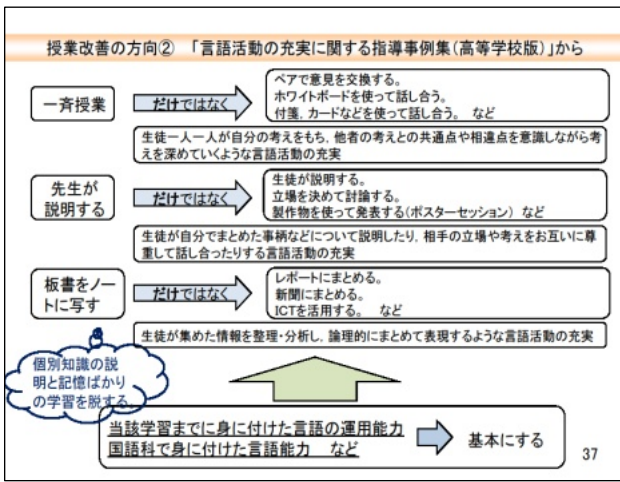


中で取り上げられる情報は、目標も単元構構も示されず、そして先生が話すばかりであったり、一問一答ばかりであったりします。一問一答では、あくまで先生が質問し、生徒は先生が求める答えを求められるということが多くあります。そして古典の場合は、訓

改善すべき授業においては、教室の

詰注釈あるいは現代語訳をさせるということが中心になってしまふ。これだと、評価の定まった解釈や知識が情報を中心になっていきます。要するに、私がお願いしたいのは、生徒が主体的にその学習内容に関われるという点でして、見通しや振り返りがなされない、生徒の意識は「先生は何をさせたいんだろうか」、あるいは「この授業いつになったら終わるんだろうか」のようになりがちです。受け身の授業ですと、「先生よくしゃべるなあ」とか、「とりあえずノートに書いておかなければ」ということになりがちです。それから一問一答も重要なんですが、そればかりやってしまうと、しかももう答えが定められた発問ばかりしてしますと、生徒の方は正解をただ求めてしまふ。何を答えれば正解なのか先生の顔色で判断しようとか、答えが合っているかということそのみに意識が集中しがちです。古典の場合は私も現場の時によく経験しましたけれども、非常にすばらしい現代語訳ばかり出てきます。自分で本当に訳しているんだろうかといった生徒を見かけます。やはり間違ってもいいから自分でしっかり意味を考えながら自分で調べたり、そして自分なりの古典の味わいといったものを感じられる、そういった授業が望ましいのではないかとこのことです。問題視しているのは単なる知識の再現あるいは先生が求めているたった一つの解答をただ求めるだけの授業、これは冒頭に申し上げましたように、こう

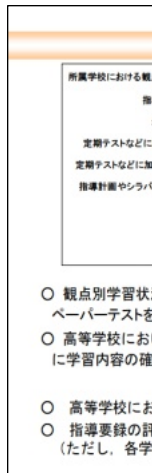
いう授業が全てということではなくて、こういう場面もあって良いのですが、こればかりという、そういう授業はどうかということを申し上げているのです。したがって授業改善の方向として、言語活動といったものが取り入れられた背景にはこういうこと



り入れられた背景にはこういうことがありまして、一斉授業も、先生の説明も、板書をノートに写すことも大事ではあるのだけれども、それだけではなくて、やはりペアとかグループで話し合ったり、あるいは生徒自身がいろいろ説明したり、さらにはレポートにまとめたり、ICTを活用していったりということ、生徒がより主体的に考えられる、思考ができる、そういう授業作りというのが非常に重要だということ、いろいろなところで申し上げております。先生が求める唯一の解

答といわれる知識を覚えるということ、例えば定期考査で、板書をノートに写した解答を暗記したらテスト勉強になるような、そんな現代文の学習はもうないと思いますが、もしあるとするならば、それは本来の学習と言えらるのだろうかということ、それを申し上げているわけでございます。

さらに学習評価につきましても、P DCAとか指導と評価の一体化という



ことをいろいろと申し上げていますが、高等学校における学習評価の特徴としては、なかなか観点別学習状況の評価が行いにくい、それから「ペーパーテスト十平常点」といった評価が従来行われてきたとかいう点がよく問題視されるのでございます。なぜいけないかといいますと、結果的に授業を工夫して、目標を定めて言語活動を取り入れて、授業をしていただいても、最終的にペーパーテストの得点が評価の数値になってしまふ、そして平常点を加えられて成績になってしまふということ、本当に、ねらったことが評価できていのかということ、観点別学習状況の評価については、全国的に、本格的に取り組み始める教育委員会が増えておりますので、一方では評価が負担になるという声もあるのですが、最初は少し大変かもしれませんが、定着していくと、これほど授業の見通しというのは持てるのか、というふうな前向きな声も多くなってきたので、ぜひ前向きにお取り組みいただければと思います。

いろいろ申し上げてまいりましたが、最後に、先進的に言語活動を取り入れた授業がたくさんございますが、私が存じ上げているものをいくつかお示しして終わりにしたいと思います。今こうしてお示ししているような、文章構成をマップでグループで作成して検討したり、それをもとに生徒同士で話し合っ

て批判したりする取組ですとか、あるいは、生徒が他のグループの説明に質問していったり、生徒が先生役になって先生は脇でそれを補助していったり、そういった生徒主体で進めていく授業も、私がおりました岡山県のある学校では進められております。その先生方の意識ですが、答えていただくことのできない個の活動が見えてくる、

「一人ではなくて共同的に授業作りをしていくということで、先生方同士の指導の共有化が図れる」、「ペアで話し合わせることによってそれぞれが思考して活動する。教師主導だとしても自分が望む解答にたどり着かせようとしてしまう」、「良い発問があれば、生徒が勝手に思考するということを実感している」、こういう前向きなお声もたくさん寄せられております。それから、そういう授業を見られた他の学校の先生方の感想も、「生徒の動きとか的確な質問が印象的であった」、「アウトプットを意図した授業展開がなされていた」、「思考力を問うような授業は本校でも取り入れたい」など、やはり生徒が主体的に考えている授業が非常に評価されているという結果が出ております。

最後に手前味噌ですが、私が大学にありましたときに、ある高校で授業をいたしました。言語活動を取り入れた授業ということで、吉野弘さんの「as born」という詩の授業をいたしました。目標は「表現に即して詩の内容を読み取り、内容や表現の仕方について自分の考えを持つ」というものでした。第二時に、「父」に話しかけた「僕」の思いを読み取ったり、父の気持ちを考えたりさせながら、そして最後の一行、僕の独白で終わっているのですが、これに込められている意味について話し合う、そして最後は僕の立場になってその詩の続きを書くという、こういう活動を取り入れてみました。先生方

はよく御存じだと思えますけれども、「父の話のそれからあとはもう覚えていない」という、その言葉から始まる最後の一節ですが、その続きを書かせることで、この詩を生徒たちがどのように受け止めたかということを書かせようと思いました。書かせると、かなり前向きに評価できるようなことを書いている生徒もいました。例えば、「母の腹の中で白く浮いていた僕の体は自分の殻を破り、これからたくさん美しい色に染まってゆくことを天国の母に見届けてほしい」のように、こちらが表現の枠組みを示すことによって、自分の解釈をしっかり示せるようになった生徒もいました。そして授業後の感想ですが、「僕の気持ちにきちんとした答えがないからこそ、周りの人の意見を聞き、自分の考えを深めることができた」、「みんなの意見を聞いて大変参考になった」、「初めて国語でグループワークをした。詩は単純だと思っていたけど、案外そういうこともないなとすごく考えさせられた」など、様々な感想が寄せられました。アンケートもいたしましたが、国語は得意な方だという生徒が比較的少なかったクラスだったのですが、やはり「考える場面が多かった」、「考えを交流できた」、そういう回答が数値としては多くございました。申し上げているように、「この詩はこういうふうに読め」ではなくて「君たちはどう読んだのか」、そのときに「根拠は何か」、そこを明確に示させながら自分の意見を述べさ

せるということに留意したつもりです。その結果、こうした回答が得られたということでございます。言語活動を取り入れた授業の成果については、これからまだまだ検証が必要ではありますが、ぜひとも前向きに取り組んでいただければと思っております。

今日お越しの先生方におかれましては、この後の齋藤先生の御講演、さらには明日の公開授業等、大変充実したプログラムが本大会では予定されています。批判めいたものも多く申し上げますが、これからの授業改善、特に時代の動きを見据えて、そして高校国語の責務も非常に重うございますので、それを自覚しながら、やはり生徒さんに高校のあの授業で今の私の言葉といったものが良く育ったというふうに述懐していただけるような、そういった授業作りにお取り組みいただければたいへん有り難いと思っております。

最後になりましたが、この研究大会を機に、学習指導要領の趣旨が活かされますように、先生方のますますの授業研究をお願いいたします。それから本大会の開催に向けて御尽力いただいております大池会長様を始め、全国高等学校国語教育研究連合会の事務局の先生方に感謝を申し上げます。本日は、その研究大会が本場に充実したものであり、それが最終的には、子供たちの言葉の力といったものにつながりますことを心から祈念いたしまして、私の講話とさせていただきますと思います。どうもありがとうございました。

研究大会「千葉大会」特集

東日本大震災 被災地からの報告

福島県高等学校国語教育研究会会長 菊地孝夫

私は福島県高等学校国語教育研究会会長の菊地孝夫と申します。二〇一一年に東日本大震災が発生いたしました。以来、福島県高等学校国語教育研究会は大会を開催することができませんでした。その間、全国高等学校国語教育研究会(全国連)、つまりは全国の皆様方から温かい義捐金をいただきました。本日は三年遅れではございますが、皆様方にひとこと御礼を申し上げるためにまいりました。皆様、どうもありがとうございます。

福島県の現状、なかでも高等学校の現状についてひとこと報告させていただきます。

3年連続の義捐金 全国の皆様の真心に感謝

東日本大震災による地震や津波は終わったかもしれませんが。しかし、その後起きた原子力発電所の事故は、現在も数万人単位の福島県民を他の地区に避難させております。高等学校においても、いくつかの学校は閉鎖され、数十キロ離れた地域でサテライト高校として間借りや仮校舎で授業をしております。来春には五つの高等学校が閉校となり、その代わりに一つの中高一貫校が誕生します。このように現在も震災の被害は続いております。その中であって三年連続で全国連、全国の皆様か

せていただきます。

齋藤孝氏が記念講演

「日本語力とコミュニケーション力」を拝聴して

松戸市立松戸高等学校教諭 角田健一

齋藤孝先生は日本語ブームの火付け役であり、多くの著書とともに、現在ではお茶の間の朝の顔としても御活躍されている。今回の御講演の間、齋藤先生は、ほとんど演壇の前に立たず、舞台の上を自在に動いて語りかけ、私

たちの身も心も(大袈裟でなく)震わせた。講演終了後は、私たちが汗をかいていたくらいだ。そのような御講演を文字で記録に残すのは文才ない我が身には重荷である。そこで、今回の御講演で多用された「意味」という言葉

ら多大なる真心の義捐金をいただきましたことは、誠にうれしくありがたい次第です。心から感謝申し上げます。

全国連義捐金会計報告

平成26年11月に開催いたしました、全国連第47回研究大会千葉大会において、参加された先生方や企業等の皆様から、義捐金をお預かりいたしました。その収支の内訳は、以下のとおりです。御報告いたします。

| | | |
|------|-------------------|----------|
| 【収入】 | 参加者からの義捐金 | 47,377円 |
| | 全国連事務局会計より | 552,623円 |
| | 合計 | 600,000円 |
| 【支出】 | 岩手県高等学校教育研究会国語部会へ | 200,000円 |
| | 宮城県高等学校国語教育研究会へ | 200,000円 |
| | 福島県高等学校国語教育研究会へ | 200,000円 |
| | 合計 | 600,000円 |

をキーワードに、自分の感想としてまとめたい。

①授業としての「国語」の意味

「国語」で学ぶ評論や文学は、人間を深く理解することにつながる。国語力とは、人間力とも言える。国語力が弱いということは、人間理解力が弱いということである。それは社会にとってもマイナスである。国語の教員として、その責任と、誇りを感じているだ

ろうか。

②国語の持つ意味

日本語には、実用的な日本語と文学的な日本語がある。前者は、新聞に書かれているような日本語で、その意味は一義的である。後者は、文学作品に用いられる、解釈が多様な日本語のことで、その意味は多義的である。生徒は両者を扱えるようになる必要があるが、このように性格の異なる日本語を、国語の授業では混同して扱っているのではない。自分の授業を振り返って大いに反省させられたとともに、日頃抱いていたモヤモヤしたもののがすっきりする思いがした。

③実用的な日本語を学ぶ意味

実用的な日本語において、言葉の意味は時代を越えて共通している。そこには、「意味」に対する普遍的な信頼感が存在する。「何を言っているか分からない」のではなく、「意味があることを言っているはずだ」と信じれば、伝わるはずだ。それは意味に対する信頼にとどまらず、人間性に対する信頼にもつながる。その、意味を把握する能力を鍛えるのが国語の授業の目的である。

では、どのように授業で学ぶのか。

実用的な日本語の力は「要約」の力でもある。これは他人の言葉を理解して誰にも分かるようにかみ砕いて話す能力であり、「内容を再生できる」力と言っても良い。その力をつけ、磨くような授業でありたい。

例1 授業内容の確認を、生徒二人一

組になって行う。その際、キーワードを三つから五つ挙げて説明、確認する。

例2 言いたいことを十五秒で一つ言う。これを徹底して行えば、限られた時間の中に「意味」を濃密度で込められるようになる。さらには理解する時間が早くなり、その分、新しい「意味」を考える時間がとれる。



例3 ある事柄について、三つポイントを挙げて説明する。評論や小説を読んでの感想や、「明治維新」「ニュートン力学」「ノーベル賞を受賞した研究」などでも良い。様々な身の回りのことを題材にできる。

④文学的な日本語を学ぶ意味
文学的な日本語に弱いということとは、

人間理解力が弱いということである。これは社会にとってもマイナスである。コミュニケーションは「複雑な人間の理解」を根底に持っており、そのために文学を学ぶことが不可欠である。

これを学ぶには、まずある程度の多読が必要である。様々な作品に触れることで、いろいろな人間に出会うことができる。そして要約力も求められる。ただ、要約すること自体にそれほど意味はない。「その次」の段階が重要である。それを国語の授業で取り組みたい。

例1 自分と関わらせて読む。『山月記』の李徴、太宰治の作品における「道化」など、自分の経験と照らし合わせて考えさせることで理解させる。また、そうした行為が「読む」ということだと分かれば、読書に対する考え方も変わるのではないか。

例2 文学を学ぶことは「本物」を味わうことだと理解させる。例えば、教科書に載る古典はほぼ全て現代語訳がされている。『平家物語』しかり、『論語』しかり、訳を知った上で原文を音読してみれば、原文の方が訳より読みやすいと多くの生徒が実感するだろう。それは古典の良さが分かったということである。作者の魂のこもった「本物」だからこそであり、そこに学ぶ価値がある。

③学校で学ぶ意味
学校とは、明確な効果のあることを

して、明確な意図を持った時間を過ごす場所であるべきだ。部活動と同じと言える。教師は「生徒をどこへ連れて行くのか」はつきりさせ、そのための技術を身につけていかなければならない。

講演の後半二十分ほどで演習を行った。二人一組になり、それぞれ一分間で、①講演の内容を要約して話す、②講演からインスパイアされたことを話す、③これから自分の学校でやりたいことを話す、といった内容である。その際、話し手は要点をアンボ良く話し、聞き手は相づちを打ったり大げさに反応したりして盛り上げることが意識させる。また、「体を動かす」重要性も指摘された。

今回は、
・軽くジャンプする
・思い切り拍手する
・ペア同士でハイタッチする、というものだった。確かに、そうすると話しやすくなるのが面白い。後日、自分の授業でも試したところ、大いに盛り上がった。

④終わりに
齋藤先生が講演の中で繰り返しおっしゃった「部活動のような授業をしてほしい」「国語は運動だ、元気にやらせるのだ」の言葉は、私たちにこれまでの授業形態からの早期の脱却、改善を訴えたように思えた。高齢社会の日本は、元気のある若者を求めている。国語の授業はそれに応えることができると、大きな課題を託されたと思うとともに、大きな決意のみなざる御講演であった。

研究大会「千葉大会」特集

○ 分科会報告 ○

千葉大会の二日目となる十一月七日には県内の七高校で分科会が行われ、各校の特色や大会主題に沿った

公開授業や研究発表が活発に行われた。ここでは、各分科会の模様を紹介する。

第1会場

県立千葉商業高校

【公開授業】

三年現代文「折々の歌」
授業者・遠藤 聡

二年現代文「『である』こと」
『する』こと」
授業者・小坂 祐子

二年現代文「『である』こと」
『する』こと」
授業者・鈴木 直子

一年国語総合「伊勢物語」
授業者・柳 真美

一年国語総合「伊勢物語」
授業者・宮郷 陽子

一年国語総合「伊勢物語」
授業者・宮郷 陽子

(県立千葉商業高校)

一年国語総合「伊勢物語」
授業者・宮郷 陽子

(県立千葉商業高校)

【研究発表】

グループ学習を通して古典の内容を的確に捉える取組 ― 人生を豊かにする態度を育てるために ―

発表者・本間 奈々絵

(県立柏陵高校)



助言者・須田 秀伸

(県立東葛飾高校 学校長)

古文を古文のまま読むための「文節読み」の試み

発表者・青塚 宏次 (県立佐原高校)

助言者・木内 和夫

(県立東総工業高校 学校長)

県立千葉商業高校で行われた授業のうち、「『である』ことと『する』こと」の授業を見学した。

言わずと知れた評論文の定番教材であり、当該校では例年三年生で扱っていたところを、今年度は二年生で扱うということであった。そのためか、抽象度の高い文章を生徒が読みこなしていけるようにする工夫が随所になされていた。

例えば導入部において、「君たちは今の生活の中でどんな権利が欲しいか」と投げかけることで、「自由」や「権利」について生徒が普段どのように考えているかを発言させたり、読解の中で、「権利の上に眠る」とはどういうことなのかを、生徒の小遣いを例にして考えさせたりしていた場面が印象に残った。

評論文の読解において、文章中の抽象的概念を、生徒の生活体験と照らし合わせながら理解させていくことの有効さを改めて認識させられる授業であった。(都立南多摩中等教育学校・丹藤 夢子)

第2会場

県立幕張総合高校

【公開授業】

一年国語総合「土佐日記 門出」
授業者・外木 博子

一年国語総合「土佐日記 門出」
授業者・外木 博子

一年国語総合「土佐日記 門出」
授業者・外木 博子

授業者・星野 葉子

(県立幕張総合高校)

二年現代文「働かないアリに意義がある」
授業者・渡邊 都詩記

授業者・渡邊 都詩記

(県立幕張総合高校)

二年現代文「働かないアリに意義がある」
授業者・緑川 裕子

授業者・緑川 裕子

(県立幕張総合高校)

二年古典「大鏡花山院の出家」



授業者・山本 宏成

(県立幕張総合高校)

二年古典「大鏡花山院の出家」
授業者・杉山 ひで子

授業者・杉山 ひで子

(県立幕張総合高校)

中国語中級「阴晴冷暖」

授業者・大野 隆敏
(県立幕張総合高校)

【研究発表】

・本を親しむ態度を育てるための取組
― 図書館から見た授業 ―

発表者・真田 陽子

(県立西部図書館)

・「聞く力」と「話す力」の充実を「伝え合う力へ」 ― 読み聞かせの体験を通して ―

発表者・宮原 美奈 (県立大網高校)

助言者・富樫 明子

(県教育庁指導課 指導主事)

助言者・稲川 一男

(県教育庁指導課 指導主事)

助言者・田邊 義博

(県立市原高校 学校長)

◇
県立幕張総合高校で行われた研究発表のうち、本を親しむ態度を育てるための取組 ― 図書館から見た授業 ― では、本を読まない生徒の要因を「習熟度の要因」「内的要因」「外的要因」という三つであると分析し、それぞれに対してのきめ細かいアプローチにより、生徒の読書意欲を喚起できることが確認された。

続いて、「聞く力」と「話す力」の充実を「伝え合う力へ」 ― 読み聞かせの体験を通して ― では、九つもの様々な実践により「聞く力」「話す力」を身に付けられることが確認され、それにより「伝え合う力」を向上させることができると確信する内容となった。(都立三田高校・鈴木 雅之、田原 桜子)

第3会場

県立千葉西高校

【公開授業】

・一年国語総合「伊勢物語 芥川」
授業者・関口 俊幸

・一年国語総合「伊勢物語 芥川」
授業者・三見 和子

(県立千葉西高校)

・一年国語総合「伊勢物語 芥川」
授業者・中村 浩一

(県立千葉西高校)

・三年現代文「舞姫」
授業者・宮川 明 (県立千葉西高校)

【研究発表】

・テーマを定めた俳句・連句作りの指導演法 ― 伝え合う力の育成を目指して ―

発表者・木村 早苗 (県立松尾高校)

・「伝え合う力」を育むプレゼンテーション ― ポスターセッションによる表現指導 ―

発表者・穴澤 真治

(県立柏の葉高校)

助言者・佐久間 敦子

(県立柏中央高校 学校長)

◇
俳句・連句作りの研究発表は、テーマを定めた俳句・連句の授業を通して、伝え合う力の育成を目指すものだった。授業実践では、テーマに沿った俳句を創作させた上で、三名から五名のグループで連歌を創作し、発表させたという。

生徒に授業実践を振り返らせると、人の感情に寄り添うことの大切さを自覚するとともに、自分の気持ちに向かい合うことを体験したという。



助言者の佐久間先生によると、木村先生は、三十年にわたって俳句の指導に当たられ、教育相談の研修も受けておられるとのことであった。その成果が十分に発揮されたご発表であった。(都立府中工業高校・吉田 咲)

第4会場

県立佐倉高校

【公開授業】

・一年国語総合「羅生門」

授業者・長谷川 充 (県立佐倉高校)

・二年古典「史記」

授業者・木村 誠一 (県立佐倉高校)

・三年古典「玉勝間」

授業者・岩岡 映 (県立佐倉高校)
・三年現代文「あるへ共生」の経験から」
授業者・米倉 一身 (県立佐倉高校)

【研究発表】

・「古文を読む力」を身に付けさせる授業の工夫

発表者・岩間 深雪 (県立佐倉高校)

・佐倉一高における教科指導上の留意点

発表者・長谷川 充 (県立佐倉高校)

助言者・安田 一夫

(県立四街道高校 学校長)

助言者・千田 茂夫

(県立流山高校 学校長)

◇
県立佐倉高校で行われた公開授業のうち、「羅生門」の授業では小説中における色彩の使われ方に着目し、主人公の置かれている状況や心象を明らかにしようとした。また、その過程で六〜七人のグループに分かれて活動を行った。

グループワークでは生徒が活発に意見を発表し合い、話し合う姿が見られた。その結果、グループの見解の中には授業者も想定しなかった視点のものも見られるなど、生徒が主体的に学び合い、深め合う効果的な学習となった。

更に、研究発表のうち「『古文を読む力』を身に付けさせる授業の工夫」では、古文を読む力を「古文を自ら進んで読む」とする力、「古文を読んで思考する力」と定義した上で、こうした

力を身に付けさせるための授業の改善
策と授業実践の様子が報告された。



(都立八王子東高校・松永 忠久、都
立秋留台高校・仲野 敏樹)

第5会場

県立木更津高校

【公開授業】

・一年国語総合「土佐日記 門出」
授業者・座間 まゆみ

(県立木更津高校)
・一年国語総合「土佐日記 門出」
授業者・石和田 秀幸

(県立木更津高校)
・一年国語総合「土佐日記 門出」
授業者・岡田 一美

(県立木更津高校)
・二年古典「今物語 やさし蔵人」
授業者・山口 真人

(県立木更津高校)
・三年現代文「動物の深淵、人間の孤
独」
授業者・上野 一仁

(県立木更津高校)
・三年古典「大鏡 兼通と兼家の不和」
授業者・森川 浩一
(県立木更津高校)

【研究発表】
『「ころろ」とはどういう小説か』
—— 悔恨と孤独と絶望の彼方へ ——



発表者・石川 光男 (県立庄浜高校)
・「読む力」、「書く力」を育てるた
めの取組 —— 評論文の再構築学習

を通して ——
発表者・岡澤 弘樹 (県立多古高校)
助言者・關 晶子
(県立実籾高校 学校長)

◇ 木更津高校で行われた研究発表のう
ち、「『ころろ』とはどういう小説か
—— 悔恨と孤独と絶望の彼方へ ——」は、
自説を展開するためにテキストを引用
するのではなく、テキストを根拠に論
を展開する『ころろ』論であった。

『ころろ』という小説は、内省を深め、
葛藤や挫折を経験して心の成長を遂げ
つつある高校二年生の生徒たちが、テ
キストに忠実に読み、小説のテーマの
持つ普遍性に辿り着く読書体験をする
上で最良の教材であり、解明すべき問
題も多く残っていることが示された。

石川光男先生は、『ころろ』のテー
マにより、現代社会の問題にも光を当
て、悔恨・孤独・絶望を、語ることで、
表現することにより乗り越えた方々の
事例についても研究されており、今回
の研究大会主題「伝え合い、つながる」
ための言葉の有効性を確認することが
できる内容であった。(都立西高校・
濱方 由紀、都立一橋高校・藤井 ゆ
き)

第6会場

県立袖ヶ浦高校

【公開授業】

・一年国語総合「伊勢物語 東下り」
授業者・松本 しおり
(県立袖ヶ浦高校)

・一年国語総合「伊勢物語 東下り」
授業者・木村 順子
(県立袖ヶ浦高校)

(県立袖ヶ浦高校)
・二年古典「大鏡 弓争ひ」
授業者・榎屋 大河

(県立袖ヶ浦高校)
・二年古典「大鏡 弓争ひ」
授業者・鈴木 美穂
(県立袖ヶ浦高校)

【研究発表】
・表現力を高めるための伝え合う活動
—— ICTを活用した授業実践 ——
発表者・木村 順子
(県立袖ヶ浦高校)

発表者・鈴木 美穂
(県立袖ヶ浦高校)
・漢文を読む意欲を高める授業展開の
研究 —— 情報機器の活用と班別学
習を通して ——
発表者・肥田 博之
(県立千葉東高校)

助言者・大滝 一登
(文部科学省初等中等教育局 教科
調査官)

助言者・武富 恒徳
(県教育庁指導課 指導主事)

助言者・廣部 泰紀
(県立君津高校 学校長)

◇ 県立袖ヶ浦高校で行われた研究発表

第7会場

拓殖大学紅陵高校

のうち表現力を高めるための伝え合う活動 — ICTを活用した授業実践 — は、平成二十三年に同校に新設された情報コミュニケーション科を中心にICTを活用した授業実践の集大成といえるべき発表であった。

クラス全員にタブレット端末を持た



せた授業展開は、公立高校としては全国初の試みである。言語活動の充実を核に据えたツールとしてのICT（タブレット端末）の活用は、学習者間の理解や読みの共有・相互評価を可能している。今後は、「反転授業」も視野に入れ、学習者のコミュニケーション能力の育成や主体的な学びを実現するための有効なツールとして、その活用がますます期待される。（都立西高校・北川 すみれ、都立大森高校・小川一美）

【公開授業】

・一年国語総合「論語」

授業者・清原 健

（拓殖大学紅陵高校）

・二年現代文「侏儒の言葉」

授業者・成澤 麻璃生

（拓殖大学紅陵高校）

【研究発表】

・作文指導の未来を考える — 大学での実践から —

発表者・富谷 利光（秀明大学）

・古典に親しむ授業の工夫 — 「演じる」ことを通して作品世界を再発見する試み —

発表者・板倉 龍一

（県立薬園台高校）

助言者・山本 善彦

（県立市原緑高校 学校長）

◇ 古典に親しむ授業の工夫 — 「演じる」ことを通して作品世界を再発見する試み — は、「古典はわかりにくい」という印象を取り除き、生徒にとっていかに身近なものとして感じさせるかという課題に取り組んだものであった。古典に親しむ態度を育てるといふ観点から、古典作品を紙芝居や演劇などに再構築して実際に生徒が「演じる」ことで、生徒自身が時代を超えた思想や感覚の共有を経験することができた。そして古典への学習意欲や関心、理解が

深まっていくことが確認された。また単なる作品内容の再現だけでなく生徒達の現代的創作をも取り入れることによって、原作になかった新たな世界観を生み出すことにも成功している。こうした取り組みは、古典に対する苦

会務報告

全国高等学校国語教育研究連合会

事務局長 佐藤 和彦

（東京都立西高等学校 副校長）

本年度、「ことばの未来再発見 — 伝え合い、つながるために —」を大会

主題に、全国高等学校国語教育研究連

合会第四十七回研究大会千葉大会を開

催いたしました。大会初日は、昨年度

と同様、午後のみの開催でしたが、文

部科学省の担当官による講話、その後

の記念講演と、充実した内容となりました。大会二日目の午前は、県内の公

私立七校を会場にした、公開授業や研

究発表と研究協議、午後は、城下町や

房総半島散策など、郷土の文学にちな

んだフィールドワークもそれぞれ用意

されており、千葉の魅力を再発見でき

る全国大会であったと実感しております。

これらもひとえに、千葉県高等学校

教育研究会国語部会の皆様の並々なら

ぬ御努力のおかげであり、千葉大会事

務局をはじめとした各方面の先生方に、

深く感謝申し上げます。

さて、中央教育審議会初等中等教育

分科会高等学校教育部会では、昨年六

手意識を払拭するだけではなく、他の古典作品に対する意欲や、想像力を伸ばすことにつながる。そして他教科への関心を高めるなどの効果も期待できる内容となった。（都立飛鳥高校・村岡 順午、都立向丘高校・高橋 幸平）

月の「審議まとめ」の中で、社会や産業界からは、社会人として最低限必要な資質・能力を身に付けるべきという指摘が、大学からは、高等学校段階での学力を確実に身に付けるべきという声、それぞれあがっていると述べています。そのことを踏まえ、高等学校や生徒の多様化が進む一方で、その共通性を確保するために、生徒が身に付けるべき資質・能力を、「コア」と位置付けていきます。さらに、社会で自立する人材を育成するために、「確かな学力の三要素」とともに、「コア」を構成する資質・能力の二つの柱をより具体化したものとして、「言語を活用して批判的に考える力、分かりやすく説明する力、議論する力」や、「多様な他者の考えや立場を理解する力や、相手の話を聞く力、コミュニケーション力などを含めた人間関係形成力」などをあげています。これらの資質・能力は、まさに国語科が中心となって育成すべき言語能力そのものです。もちろん、その育成の中核をなすものは、「ことば」を使って伝え合い、他者とつながることを目標にした、国語科の授業の充実に相違ありません。そのことから、「ことば」の教育を重視し、

「未来を再発見」することをめざす本大会の主題は、今後の高等学校国語科の教育の在り方を、あるいは明示しているのかもしれない。この千葉大会が、御参加された先生方にとって、指導と評価の改善のための多くの御示唆を得られる機会となったことを確信しております。

なお、全国連事務局は、今年度は、事務局長校を東京都立西高等学校内に、本部事務局を湯島聖堂斯文会館内にそれぞれ置き、「一人の成果を全ての教師のもとに」をスローガンに、二十四名のスタッフが、以下の三部の組織体制で、活動を行っております。その主要な活動内容を、御報告いたします。

* * *

◇総務部

○各都道府県国語教育研究団体、文部科学省、協賛団体との連絡調整

○全国代表者会議(年一回)の開催

○全国大会(研究大会)の支援

○「全国高校生文芸コンクール」の審査及び運営協力

○各種コンテストの後援及び予備審査副教材(読本・問題集・文法書等)の企画及び編集

◇研究部

○各都道府県国語教育研究団体発行の研究紀要等の調査研究

○年間や単元の指導と評価に関する実践研究(フロムTの事業を継承)

○「研究授業・研究発表一覧」の編集発行。

※各都道府県国語教育研究団体発行の

研究紀要を、事務局宛にお送りください。調査研究の資料として活用させていただきますとともに、文部科学省にも資料提供をいたします。

○全国連ホームページ(<http://www.ko-kugo.gr.jp/>)の管理運営

※「研究授業・研究発表一覧」を含め、ホームページを活用した研究成果の発表等を企画中です。全国連のサイトをぜひ御覧ください。

◇広報部

○「全国連会報」の編集発行

※「全国連会報」は、全国の高等学校等へ発送いたします。

* * *

平成二十七年の全国高等学校国語教育研究連合会第四十八回研究大会は、十一月十三日(金)から十四日(土)にかけて、東京都の大田区民ホール・アプリコを中心に開催いたします。本年度にも増して盛況な大会となりますよう、御支援をお願いいたします。

【事務局本部事務所】

〒一三三〇〇三四

東京都文京区湯島一―四―二五

湯島聖堂斯文会館内

(e-mail: zenkokuren@hotmail.co.jp)

※各都道府県の研究紀要等の郵便物は、本部事務所にお送りください。

【事務局長校】

〒一六八―〇〇八一

東京都杉並区宮前四―二―三二

東京都立西高等学校

電話 〇三(三三三三三)七七七―

FAX 〇三(三三三三三)一三四〇